

南京大虐殺を心に刻む旅 水谷栄（ジャーナリスト）

南京大虐殺から 70 年。この大惨劇についての国際学術会議が 2007 年 11 月 24・25 日、南京で開かれた。会議への出席を目的の 1 つとする「南京事件をたどる 5 日間の旅（団体旅行）」の参加者は 23 日、杭州空港に降り立った。ここから南京までバスで向かう。300 キロの道のりである。70 年前の 11 月 5 日に杭州湾岸の金山衛へ上陸した日本陸軍第 10 軍は、それまで大苦戦を強いられていた上海派遣軍とともに国民党軍を追撃しつつ南京をめざした。日本軍はどこを進撃して行ったのか。

杭州市から湖州までが 50 キロ。そこから先のバス経路は、日本軍が南京攻略戦を展開した道すじの 1 つにほぼ重なる。湖州占領は 1937 年 11 月 24 日、長興占領 26 日、そして南京占領が 12 月 13 日である。平坦なのんびりした田園地帯を走っていると、このあたりで日本軍による放火・略奪・暴行・虐殺・強姦が繰り返されたとは想像もつかない。だが、陸軍第 10 軍の上陸から南京占領のあとまで、南京攻略戦の全行程でこれら大暴虐は展開された。「虐殺だけ」が「南京市内のみ」で「占領直後だけ」、「やむを得ない事情」によって「一時的に突然起きた」のではない。《『南京大虐殺』は『南京攻略戦での一連の大暴虐を意味する』》と、明確に定義されるべきであろう。

気温は成田空港とあまり変わらず、寒くはない。タイヤのパンク修理に時間をとられ、南京に着くとすっかり暗くなっていた。

24 日、南京大学で「南京大屠殺史料学術検討会」（中国側の呼称）が開かれ、中国の 5 人、日本の 2 人が研究発表をした。25 日午前には中国の 12 人と日本の 2 人が報告。中国での南京大虐殺研究は近年、進んでいるという。

会が始まると、最前列席の真横に 150 センチほどの高さのビデオカメラを置いた中国人テレビ局カメラマン(身長 165 センチくらい)が、赤い服を着て立ったまま会議の様子を写していく。彼のおかげで、客席を向いた主催者や発言者が参加者からは非常に見にくい。それに対し、3メートル離れて同様に撮影する身長 180 センチほどの外国人（一見、ヨーロッパ系）は最前列に置いたカメラの高さを 140 センチくらいにし、自分は床にしゃがみこんで周りの迷惑にならないよう気づかっている。取材態度がまるで違う。数十分後、たまりかねた日本人たちが強く抗議し、カメラマンは右端の通路へ移動した。そこでも用はじゅうぶん足りるのである。

事前に「会議手冊」（日程と報告要旨）が配られる。発表はいずれも具体的な話ばかりで有意義だ。しかし、せっかくの同時通訳の技量が低く、日本語になっていない個所が目立つ。日本人の間で「これでは困る。通訳を変えてほしい」と強い不満の声が上がったが、ウデのいい通訳は料金が高い上に、これからすぐ手配することも不可能なのだと聞かされる。

この日は雨花台烈士陵园も訪ねた。南京攻略戦途上での「100 人斬り競争」で知られる日本軍 M・N 両少尉はここで処刑されたとの説明を受ける。残念なことに、「烈士紀念館」近

くの屋外無料トイレが汚い。彫刻や庭園、それに建物がとても立派なのに、なぜ便所をきれいにできないのだろうか。

25 日午後は、南京師範大学で日本人俳優による鎮魂のための芝居『地獄の12月—哀しみの南京』を鑑賞する。戦時御用商人と職業軍人を父に持つ 2 人の日本人が、親による中国人への加害の罪を深く意識して演ずる芝居だ。200 人ほどはいる会場は学生らしい若者が多く、満席。「南京大屠殺幸存者」証明書を手にしたお年寄り（男性）1 人と夏淑琴さんが会場 1 列目に座っている。南京で 9 人家族のうち 7 人を日本軍に殺された夏さんは、亜細亜大学の東中野修道教授によって虐殺事件のニセ被害者呼ばわりされた。だが東京地裁は 11 月 2 日、夏さんに対する名誉毀損と人格権侵害を認め東中野修道「教授」が敗訴した。会場では劇に感動した 1 人の中国人客が立ち上がり、「良心的な日本人ありがとう」と叫ぶ 1 幕もあった。

ただ、この芝居については旅行参加者の中から疑問の声も出された。「『何が悪い』と開き直って父の犯罪を正当化することはもちろん間違いだ。ただ、加害者はあくまでも父親であり、子どもには何の責任もない。だから、子どもが父の代理として中国人に謝って罪をつぐなうべきだとの考えはおかしい。加害の側に対する『戦争責任の追及』こそが子どもの世代のなすべきことではないか」というのである。会場外のトイレに行くが、扉がついてなく開け放した。

26 日。南京大虐殺を長年調べてきた小野賢二さんの案内による、集団虐殺関係の現場見学会。上海派遣軍の第 13 師団（仙台）山田支隊が捕虜を連行・虐殺したルートを歩くことになった。小野さんによれば、「日本軍による集団虐殺が行われた揚子江岸の草鞋峡では、被害者証言による被害者数は約 10 万から 15 万人。しかし実証できた数は、山田支隊による 12 月 16・17 日の捕虜約 2 万人虐殺だけ」だという。複数の陣中日記が正しければ 18 日にも 1 万人以上の集団虐殺があったことになるが、詳細はまだ分からないそうだ。大量虐殺現場は幕府山と揚子江支流にはさまれた一帯だ。「侵華日軍南京大屠殺草鞋峡遇難同胞紀念碑」の前で旅行参加者の僧侶がお経を唱え、そのあと一行は周辺を見学した。捕虜収容所があったと小野さんが考える五百村近辺で公共厕所（有料公共トイレ）に立ち寄ったが、その汚さには驚く。

26 日午後、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」へ向かう。南京大虐殺 70 周年を記念して 12 月 13 日に新館が公開される。解説書によれば、展示館は江東門集団虐殺と「万人坑」遺跡の上に建てられた。1985 年に開館したあと 2 度の増築をかさね、新しい敷地面積は 7 万 4 0 0 0 平方メートル、建築面積 2 万 5 0 0 0 平方メートル、展示陳列面積 9 8 0 0 平方メートルとなった。仕上げ段階の紀念館前には青銅の像がいくつも並ぶ。避難する市民の嘆きを表現したものだ。子を腕に抱きながら天を仰ぐ母の像は高さ 10 メートルほどだろうか。どの像にも深刻な切迫感とすごみがある。

ここでは南京大虐殺だけを取りあげているのではない。「近代日本は中国に幾度ももの侵略と加害を行い、一連の暴行を起こしてきましたが、中でも南京大虐殺は日本軍の中国侵略

の罪行の中でも最も凶暴かつ残忍な行為の最も典型的な一例です」(解説書38ページ)という考えに基づいてつくられた施設なのである。だから日中関係をさかのぼり、「日本の初期の台湾侵略」(39ページ)として1874年の日本軍台湾派兵から紹介している。

展示陳列区プロローグホール壁面には「犠牲者300000」の文字が中国語・英語・日本語で書かれている(6ページ)。犠牲者数については次の記述もある。

「1937年12月13日、日本軍は南京を侵害・占領後、公然と国際公約に違反し、武器を下ろした中国兵士と寸鉄を帯びぬ平民をはばかりなく虐殺することは6週間にもわたりました。犠牲者の総数は30万人以上にものぼり、南京の3分の1の建物が破壊されました。市内では2万件余りの強姦、輪姦の暴行が起こり、無数の公私の財産が略奪され、文化の古都は空前の災難に見舞われました」(7ページ)

これによると、30万人以上の犠牲者が出たのは日本軍が南京を侵害・占領した「後」のことになる。しかし、「占領後の犠牲者は30万よりも少ないだろう」というのが日本での通説である。ただ、日本軍による上海から南京への攻撃について「日本軍が向かうところにはどこでも、はばかりなことなき虐殺、焼き討ち、略奪、強姦が行われ、江南一帯の民は悲惨な境地に陥りました」(8ページ)と書くのだから、そしてこれは事実なのだから「南京大虐殺」と書くときに「南京占領後」にこだわる理由は乏しいのではないか。占領する前にも大暴虐はあったのだ。12月13日で線を引く必要はない。やはり≪「南京大虐殺」は「南京攻略戦での大暴虐を意味する」≫と定義した方がいいように感じる。

「遺跡区」には、多数の犠牲者が埋葬された「万人坑」遺跡が展示されているという(61～63ページ)。埋葬当時のままの状態で開催されることがぜひ必要だと思うが、開館前のためそのことを確認できなかったのは残念だ。

敷地の前に自転車が数台、小型乗用車1台。バスはそのそばに停車する。200メートルほど離れて大きな作業車が1、2台。立ち入り禁止の掲示も縄もない。市民が像を見ている。像前広場の作業員は数人ほどだ。テレビ局の人だろうか、像を撮影している。「バスはここで30分ほど停まります」と言われたので、青銅像を見ながら写真を撮る。なかなか全部は撮りきれない。だが10分後、「みなさん、急いでバスに戻ってください」と言われた。何が起きたのか? 計7枚撮ってバスに乗る。後で聞いたところでは、「記念館のさらに上部機関の許可がおりていないので12月12日までは撮影をしてはならない」のだという。許可が出ない理由は、「日本人の撮った写真が開館前の段階で日本右翼に見られる恐れがある。新館について右翼に知られることは良くないから」。

これでは意味不明。何の説得力もない。実は、「もし何か問題が起きると、担当役人の責任が問われかねない。地位が危うくなる。もめごとの芽は摘んでおきたい」ということではないか? これは参加者たちの中からあがった声でもある。それに、どうせあと十数日で公開されるのだ。撮影をいまの時点で、しかも建物の外からの撮影を禁止することに一体どんな意味があるのだろうか。

この記念施設には「前事を忘れざるは後事の師なり」を意味する中国語と、同じ意味の

フランス語・ドイツ語・英語など 12 か国語が刻まれた十数メートルの高さの壁がある。解説書には、「目的はより多くの人に南京大虐殺を知ってもらうことです」（解説書 37 ページ）とある。「歴史は鏡です。歴史の教訓を忘れてはなりません。中国侵略日本軍の南京大虐殺の歴史の事実、私たちに戦争が人類の文明への災難であること、戦争が獣性を助長させ、人間性を押し殺す野蛮な機械であることを示しています」（37 ページ）とも書く。さらに、「日本国内の一部の勢力が歴史を歪曲し、侵略戦争を美化しようとする企みには警鐘を鳴らす必要があるでしょう」（54 ページ）と明言するのだ。

なんだ。それなら、なにも「日本の右翼」を気にし恐れる必要はない。堂々としていればいいのだ。「より多くの人に南京大虐殺を知ってもらう」目的のためには、撮影する人が多ければ多いほど有益ではないか。工事の妨げにまったくならない撮影まで禁止する必要がなぜありますか？ しかもけっきょく、フィルムを没収されることはなかった。これも非論理的な対応である。「上部機関」の担当者としては、「私は、『撮影するな』と下の者にキビシク注意しておきました」という言い訳が「自分の上役」と「自分の所属する上部機関のさらに上部機関」にできさえすればいいのかもしれない。中国における官僚主義の一端を見た感じがする。

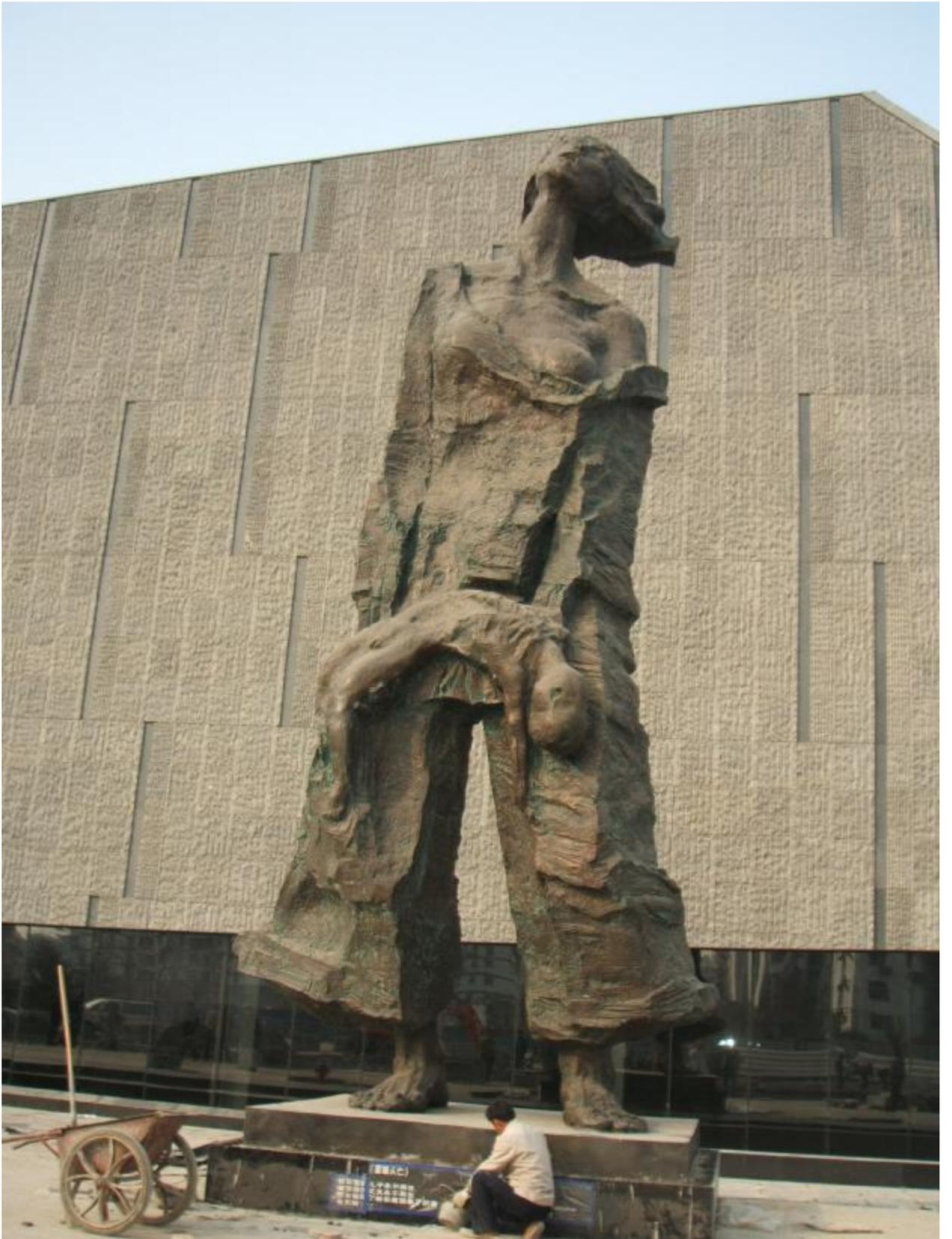
11月26日夕方、電車に乗り上海へ行く。途中で通過した鎮江・常州・無錫・蘇州はいずれも、上海派遣軍が1937年11月19日（蘇州）から12月8日（鎮江）にかけて占領したところである。

旅の最終日、11月27日。上海の旧租界地などを回ったあと宝山区へ。ここで、日中両軍が死闘を繰り広げ日本軍が多数の死傷者を出した揚子江岸の激戦地を訪ね、岸辺の抗戦記念館を見学した。この記念館でも、カメラを見た係員に撮影を途中で禁止される。一般市民が日本軍の暴力にさらされている様子を人形などで再現した場面も撮影してはいけない。渡された案内書は縦21センチ、横42センチの紙1枚。館内25枚と館外7枚の写真がその両面にカラー印刷されている。小さいので細部は不明。いずれも黒っぽくにごり、不鮮明だ。日本軍による侵略の「事実」がこの館では公開されている。広く世界中の人びとに展示内容を知ってもらおうとは考えないのだろうか。禁止とは正反対に、どんどん撮影させなければ館の存在意義はなくなってしまう。だが、ここでもフィルムは没収されなかった。中国は不思議な国だ。

①幕府山(右)と揚子江(写真の左側)の間の道を行った先が捕虜大量虐殺の現場(南京城外)。



②子どもを手にし、天を仰ぐ母親像(「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」にて)。



③避難する民衆の像を見る人、撮影する人。作業員がチラホラ。ここで撮影禁止を告げられた。（開館17日前の「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」にて）。



④署燕門すぐそばの「埋葬地紀念碑」（南京城内）。上の折り鶴は日本の高校修学旅行団が供えたもの。

